



Title	一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について : 『マイ・ブローケン・マリコ』を例に
Author(s)	数納, 風香
Citation	研究論集, 23, 323 (左) -338 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.23.l323
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91108
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_rjgshhs_23_p323-338_l.pdf



一方的で不成功なコミュニケーションと コミュニケーション分析における 分析者の立場について

：『マイ・ブローケン・マリコ』を例に

数 納 風 香

要 旨

本稿は、コミュニケーション分析における分析者の立場の再考と、それを踏まえた、一方的で、失敗しているにもかかわらず外部からは成功しているかのように見える「不成功」なコミュニケーションについての記述を試みるものである。そのための具体例としてマンガ『マイ・ブローケン・マリコ』を取り上げ、作品内のコミュニケーションを追いながら、実際には成立していない会話が成立しているかのように描かれていることを示す。また、作品内のコミュニケーションに直接参加することができない一方で登場人物と視点や注意を共有する読者、分析者の立場を考えるにあたってマンガ表現における「視点」の問題が重要であることを指摘した上で、映画へのアダプテーションによってマンガで描かれていた視点やコミュニケーションの在り方が変化していることに触れる。まとめとして、発話の受け手でありながら直接的な参与者である話し手や受け手とは異なる階層に立つ分析者の立場を考えるにあたって、必然的にその立場に立たされるフィクションを使用した分析は有用であり、またそれを踏まえた上で、「不成功」なコミュニケーションのようなものからコミュニケーション分析の新たな視点が生まれる可能性があることを指摘する。

1. はじめに

『マイ・ブローケン・マリコ』は、平庫ワカによる4話完結の短編マンガ作品である。2019年7月に『Comic BRIDGE online』（KADOKAWA）で連載が開始された直後からSNSなどで反響が広がり、第24回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞のほかさまざまな賞を受賞した。

また、2022年にはマンガを原作とし監督・脚本をタナダユキが務めた同タイトルの映画も公開された。

以下、まず第2節では、本稿で「コミュニケーション」をどのように捉えるかを整理し、またフィクション作品を通じて分析者の立場を捉え直す意義を考える。次に『マイ・ブローケン・マリコ』から具体例を挙げ、第3節では「不成功なコミュニケーション」(後述)を、第4節では「一方通行のコミュニケーション」(後述)について取り上げる。また、マンガ作品内のコミュニケーションを分析するにはマンガの「視点」表現が重要であると考え、第5節ではこの点について整理する。第6節では「視点」をはじめとするマンガ特有の表現が映画へのアダプテーションによってどのように変化しているかを明らかにする。第7節はフィクション分析が現実世界を捉えるために有用であること、「一方通行のコミュニケーション」のようなものがコミュニケーション分析に新たな視点をもたらすことを指摘し、そこではコミュニケーションの直接的参与者だけでなく分析者の存在に注目すべきであるとして、本稿のまとめとする。参考として本稿末尾に『マイ・ブローケン・マリコ』の梗概を付した。

2. 「不成功なコミュニケーション」と分析者の立場について

柏端(2016:67)は、コミュニケーションの定義は難しいと述べた上で、「「コミュニケーション」とは、典型的にはメッセージの送りあいを中心とする共同行為と関連する諸結果とから成る複合的な出来事ということができるだろう」としている。

大橋(2019)は発信者(人物A)に送信意図があるかどうか、受信者(人物B)が受信したかどうかという点から整理し、人物Aにメッセージの送信意図があるとき、人物Bによってメッセージが受信されたものを「成功したコミュニケーション」(Ⅰ)、人物Bによってメッセージが受信されなかったものを「失敗したコミュニケーション」(Ⅱ)とした。また、人物Aにメッセージの送信意図がないとき、人物Bによってメッセージが受信されたものを「無意図的コミュニケーション」(Ⅲ)とし、人物Bによってメッセージが受信されなかった場合は、コミュニケーションは成立していない(Ⅳ)とした。重要なのは、送信意図をもって送信されたものが受信されるⅠだけでなく、受信されなかったⅡや送信意図がないのに受信されたⅢも「コミュニケーション」になるという点である。

ここで、本稿における「一方通行のコミュニケーション」について整理する。これは情報が一方的に伝達され、相互性やフィードバックが欠如している状況を指す。テレビのような放送メディアや、講義、プレゼンテーション、または参加者の一方が意図的に、もしくは能力的に反応できない個人間の対話などで見られる。したがって上述のⅡのようなものは一方通行のコミュニケーションの一部であると言える。一方通行のコミュニケーションが、必ずしも失敗であるとは限らない。たとえばニュース番組の場合、送信者は特定個人というよりも視聴者とい

数納：一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について

う不特定多数に向け、意図をもって一方的に送信し、受信者たちがそれを受信すれば、これは成功したコミュニケーションと言えるだろう。したがって一方通行のコミュニケーションは必ずしも失敗したコミュニケーションになるわけではなく、その原因となる場合がある、という関係になる。

第3節以降で具体例を挙げながら見ていくが、『マイ・ブローケン・マリコ』の特徴の一つとして、「失敗したコミュニケーション」があたかも成功しているかのように描写される、あるいは読者がそのように認識してしまうように見える描写が頻繁に登場するという点がある。主人公シイノと死んだ親友マリコは、互いに一方的にメッセージを発信するが、その一方通行なメッセージがつぎはぎされた結果、自然かつ相互的な、成功したコミュニケーション「のように見えるもの」が発生する。マンガの表現技法である吹き出しやコマ割りを有効的に使用したそれらの描写を、鑑賞者たちがなぜ成功したコミュニケーションであるかのように誤認してしまうのかについては、グライス（H.P. Grice）の「会話の原理」の理論が重要な視点になるのではないかと考える。

我々が日常において、どのように言語コミュニケーションの成立を可能にしているかを説明する理論の一つが、グライスによる「会話の原理」である。グライスは、会話の参加者は、そこに共有されているある共通の目的に照らして、協調的に発話を行うはずであるとし、そうすべきである（そう期待される）という原則を「協調原理」（the Cooperative Principle）としてまとめた。

また、話し手にとって意図とはどのようなものであるかといった問題を扱ったグライスの「哲学的アプローチ」（小山・甲田・山本 2016：61）に対し、関係性理論を代表とする「認知的アプローチ」（同書：62）では、聞き手の認知的なプロセスを記述しようと試みられてきた。

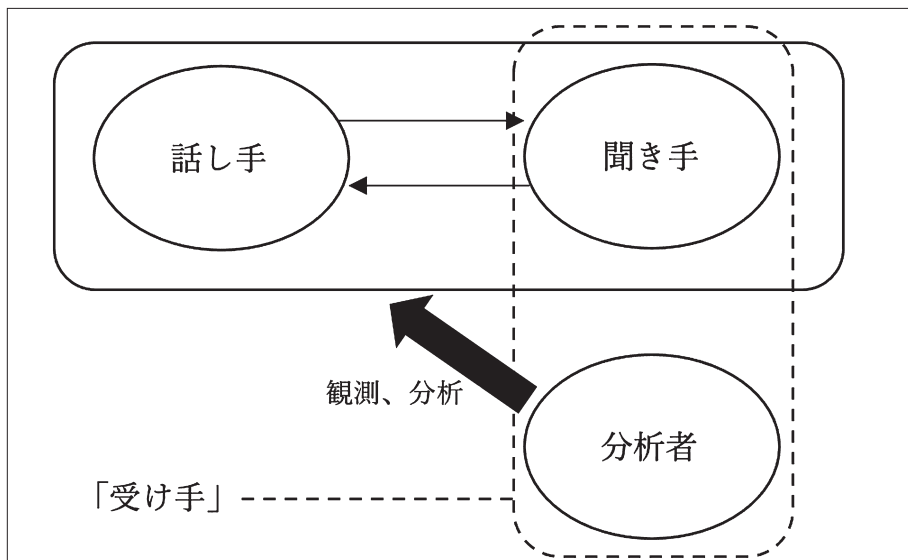
グライスの理論をはじめとした従来の語用論は会話の参与者の会話への関わり方を論じているが、本稿では、会話が行われている際に受け手として想定されていない受け手が、外側から会話を分析する際の関わり方という視点から考えたい。たとえば、マンガの登場人物とその読者はこの関係にあたるだろう。登場人物の会話を、そこに当事者として参加することなく、いわば盗み聞きのように観測している読者も、そこで行われる発話の「受け手」であり、ある種の参与者であると言える。

マンガの読者は、二人の人物が互い違いに、互いの発話を受けた（ような）内容を発話しているところが描写されると、その二人の間ではコミュニケーションが成立しているように認識する。二人の会話を、そこに介入しない第三者として眺めている読者は、それが実際には成功し得ないはずのもの、たとえば生きている人物の発話とすでに死んでいる人物の発話や、現在時間の人物の発話と過去の人物の発話であっても、それらが相互的なコミュニケーションのようであるように捉えてしまう。

本稿ではコミュニケーションの定義を、大橋（2019）を参考に捉える。まず、受信者が受信

したか否かに着目し、送信者が意図して発信し、かつ受信者が受信したものについては「成功したコミュニケーション」、受信者が受信しなかったものについては「失敗したコミュニケーション」とする。その上で、「失敗したコミュニケーション」であるにもかかわらず、分析者が成功したものと捉えてしまうようなものを、成功ではなく、しかし失敗とも断言できないという点から、「不成功なコミュニケーション」と呼ぶことにする。この定義を踏まえ、コミュニケーションを捉えるにあたって、話し手と聞き手の関係を観測する「分析者」の存在に注目する。

発話の「受け手」であるという点において、聞き手と分析者は共通している。しかし両者には、話し手が受け手として想定しているかどうか、受け手側から話し手にフィードバックを返せるかどうかという点で階層的な差がある(図1)。この分析者の立場の特性は、日常の言語を分析する際は言うまでもなく、フィクション作品を分析するときに顕著になる。フィクション世界の会話は分析者のいかなる行動にも左右されない。分析者がその会話を理解できなくても、当事者間で会話が成立していればそのまま進行するし、逆に分析者が理解可能と考えるやりとりであっても、当事者が理解できなかった場合は会話が中断される。フィクションはフィクションである以上、それを扱う我々は、必然的に外部から観測する立場になる。この必然性から、フィクション世界の分析は「分析者」の立場を捉え直すための糸口になるのではないかと考える。



【図1】

3. 「不成功なコミュニケーション」

ここから、『マイ・ブローケン・マリコ』における「不成功なコミュニケーション」を、具体的に取り上げる。

主人公シイノは、死んだ友人・マリコの遺骨を抱え旅に出る。作中時間においてマリコは死亡しており、会話、応答が不可能な存在である。そのため、シイノとマリコのコミュニケーションが成立するのは、本来、回想で描かれる過去でしかあり得ない。しかし作中では、過去のマリコの発話や手紙と、それに応答するような現在のシイノの発話あるいは思考、さらにそれを受けた上で過去のマリコが発話しているかのような、シイノとマリコの「不成功なコミュニケーション」描写が頻繁に登場する。このような描写は、吹き出し、フォント、コマ割りといったマンガの表現技法を巧みに用いて、読者がそれらをコミュニケーションであると認識するように表現される。

登場人物の言葉は、実際の発話を表す吹き出し（以下吹き出し内を「」で表す）、思考を表す雲状の吹き出し（以下〔 〕）、モノローグを表す四角形の枠（以下〈 〉）で書き分けられている。なお、この作品は基本的にシイノの視点を中心に描写される物語であるため、内的発話である思考やモノローグはシイノのものに限られる。

第二章は〈走りながら思い出していた。〉〈マリコが今までによこしたたくさんの手紙たちのこと。〉というモノローグから始まる（単行本：pp.37-41）。続いて、To シイちゃん、マリよりと書かれた手紙のコマ、中学生のマリコとシイノが手を振り交わしているようなコマが続き、次のページで現在の（遺骨を抱えて逃亡している）シイノに切り替わる。雲状の吹き出しで「……匂いで先公にバレないようにトイレの消臭スプレー持ち歩いてたからだよ…」と手紙内の疑問¹に対する回答がなされ、次に中学生のマリコが笑っているコマが続く。これはあたかもシイノの回答に対して笑っているように見える。コマの繋がりから、過去のマリコの手紙→現在のシイノの思考→過去のマリコの笑顔が連動したコミュニケーションのように見えるが、当然実際には連動していない。

マリコの遺骨を抱えて帰宅したシイノが描かれたのち、中学生時代の二人の会話の回想が挿入される。なお、回想における吹き出しの中の文字は細いゴシック体であり、現在の発話で主に用いられるフォント（商業マンガで使用されるゴシック体漢字と太明朝体かなの組み合わせ）と区別されている。夏休みに二人で海に行こうと提案したシイノに対し、マリコは父親が怒らから行けないと返答する。次のページでは現在のシイノがマリコの遺骨に向かって、もう怒ら

¹ “手紙内の疑問”を含む手紙全文は以下の通り。

「TO シイちゃんへ こんにちは！シイちゃんと同じ組になれてうれしいです。シイちゃんはいつもタバコを吸っているけどいいにおい。どうしてだろ…？マリより」

れないから海に行こうと話しかけ、その下に中学生のマリコがシイノの方を振り返っているコマが続く。ここでも、過去のシイノの発話→過去のマリコの発話までは会話が成立しているが、過去のマリコの発話→現在のシイノの発話→過去のマリコの驚いたような顔、の部分については、本来成功しえないコミュニケーションとなっている。

時間軸の交錯は、シイノが行き先を考えながら外を歩いているシーンでさらに顕著に起こっている（単行本：pp.61-65）。道で立ち止まり泣いているシイノは、以前二人で出かけた際に、マリコが“まりがおか岬”に行きたいと言っていたことを思い出す。このシーンでは、20歳前後のマリコを、波打ち際に立つ中学生のシイノが見ているような画が挿入されることで、時間軸の交錯はより複雑になっている。また、中学生時代のシイノとマリコについて、二人では海に行けないという会話が先に描写されていることをふまえると、中学生のシイノが海にいる（そして視線の先にマリコがいる）というこのコマは単なる回想ではないことがわかる。この一連のシーンではシイノとマリコの発話や表情が相互的なものであるようにコマが繋げられているが、時間軸上で異なる位置にいる以上、やはりコミュニケーションとしては失敗している。

シイノが居酒屋で酔い潰れている場面でも、シイノとマリコの会話のような画面進行が起こる。注目したいのは、吹き出しの中のマリコのセリフが細ゴシック体であることに加え、鉤括弧（「」）が付けられているという点である（単行本：pp.94-96）。

マリコのセリフは一見、シイノの言動に対応しているように見える。例えば、マリコが口を開いているコマに配置された「さっきの人優しかったねエ」というセリフについて、放置された遺骨を見守り他人であるシイノに金を贈与したマキオを知っている読者にとっては、マリコがマキオについて言及しているように感じられる。しかし、死んでいるマリコがマキオに言及することはそもそも不可能であり、鉤括弧でくくられたこれらのセリフは、おそらくシイノの記憶の中にある、過去のマリコの発話である。

また、シイノが遺骨の方を向き「マリコ」と呼びかけると、まるで隣にマリコが現れたかのようにコマが配置されているが、シイノが左側を向き、マリコも左側を向いているため、実際には二人は向かい合っていない。また、二人が同じコマの中に配置されることもない。しかしシイノが後ろ姿で描かれていることで、一見するとシイノとマリコが顔を合わせているような構図となる。セリフだけでなく人物の配置やコマ割りといったマンガ特有の表現も、読者が二人のコミュニケーションを成功したもののように誤認する一因となる。

鉤括弧のついたマリコのセリフは、第四章、まりがおか岬の崖の場面で再度登場する（単行本 pp.127-131）。遺骨を抱えたシイノがマリコにまりがおか岬に到着したことを伝える発話をする、次のページでは、遺骨のあった位置にマリコが描かれ、そのマリコのセリフに鉤括弧がついている。

この場面でも、鉤括弧付きのセリフは過去のマリコの発話であると推測される。居酒屋の場面と異なるのは、シイノが「ううん」「だったら」など、マリコの発話を受けた言動をしている

数納：一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について

ことである。

痴漢に追われている少女が「助けてください！！」と声を出しながら走り寄ってくる場面では、次のページから3コマにわたり、中学生、高校生、20歳前後のマリコが助けを求めて走る様子が描かれる。特に3コマ目については、「シイちゃん」「助けてよう」と発話しており、これが単に少女の姿にマリコを重ねただけのものではないこともわかる。いずれのセリフにも鉤括弧はなく、また、それまでの回想的なシーンで用いられていた細ゴシック体ではなく、現在の発話で用いられていたフォントが使用されている点も特徴的である。マリコは過去にも、また当然死後にも、シイノに向かって「助けて」と言っている描写がない。逃げてくる少女の姿に、自身の理想を付加したマリコを重ねたシイノは、マリコの遺骨で痴漢を殴り飛ばす。

補足として、この岬のシーンは言語的なコミュニケーションに限らず、本来ありえないはずの絵によって不成功なコミュニケーションが強調されている。たとえば居酒屋のシーンではマリコの映される向きが固定されており、またマリコとシイノが同じコマの中に描かれることはなかったが、この岬のシーンでは、岬でシイノとマリコが抱きしめ合う様子が俯瞰的に映され、マリコが実際にシイノと同じ時間・空間にいるかのように錯覚させられる。

ここまで、『マイ・ブローケン・マリコ』内の不成功なコミュニケーションを具体的に追ってきた。話し手、聞き手という二者間の相互的なやり取りが失敗しているにもかかわらず読者には二人のやり取りが成功しているように見える表現は、フィクションの技法ではあるものの、分析者という想定外の受け手が自分から離れたところで行われているコミュニケーションをどう理解するかという問題を考えるにあたり重要な糸口となりうる。

4. 一方通行のコミュニケーション

まず、マリコからシイノに向けた、一方通行的な発信が描かれている箇所を見ていく。

マリコはシイノに、封筒に入れられたものから、おそらく学校の教室で手渡されたであろう便箋を二つ折りにしただけのものまで、多くの手紙を書いている。シイノはそれを缶に保管していたが、マリコに手紙を返した描写はない。

また、第四章の冒頭の1ページ（単行本；p.118）では、描かれている4コマ全てにおいて、マリコからシイノへの、様々な媒体を使用した一方的な発信が描かれている。電話越しに年賀状のお礼をするマリコ（シイノは職場でこの電話を受けており、困った顔で頬を掻いている）、花火売り場で隣にいるシイノを見ながら「これ大人買いして実家燃やそっかな」と笑顔で言うマリコ、「最近全然会えなくなっちゃった」と書かれたマリコからの手紙（シイノはこれを風呂上がりに読んでいる）、マリコから23:58に送信されている「今日」「会いたいな」というメッセージ、いずれにもシイノからの返答は描かれていない。

遺骨を奪取するためにマリコの実家を訪れたシイノの過去の回想の中で、高校生のマリコが

父からの性暴力とそれによる母の家出を語るシーンがある（単行本：p.20）。屋上でマリコは、後ろに立っているシイノを振り返らず、前を向いたまま「きいてよ シイちゃん」と言う。シイノも初めはマリコのことは見ているが、マリコが「わたしのせいなんだって」と言っているコマでは斜め下に視線をやり、そして最後まで言葉を発しない。

次に、シイノからマリコに向けた一方的な発信を見ていく。

マリコの死後、シイノは思考の中でも、実際の発話でも、マリコに呼びかけるようなものが多く見られる。実際の発話だけでも、遺骨の奪取を決意したシイノの「今度こそあたしが助ける 待ってろマリコ」、海に向かうことを決めたシイノが遺骨に向かって語りかけた「だからマリコ 行こう 海」、夜道を歩くシイノの「ねえマリコ 本当に手紙の一つも残さず死んだの?」、居酒屋で酔い潰れたシイノの「ねえ?マリコ…」などが挙げられる。

シイノはマリコに関するもの以外にも、ひとりごと（モノローグや雲状の吹き出しで表現される思考のような内的発話ではなく、作中で実際に発話していると考えられるもの）²が多い。そのため、マリコに呼びかけるような発話についても、それがマリコとのコミュニケーションを図ろうとしているものであるか、そうでないかは判別し難い。ただ、シイノは居酒屋で話しかけてきた高齢男性の集団に対し「てめえらとくっちゃべってる場合じゃねえんだよ!! マリコと交信できなくなんだろォォがああああ」（単行本：p.99）と大声を出している。ここで「マリコと交信」という表現を用いていることから、少なくとも居酒屋での呼びかけや、居酒屋と同様に呼びかけ後にマリコの幻影のようなものが描写される岬での呼びかけについては、マリコに向けて発信されたものと判断してよいのではないかと考える。

岬でのシイノは、「あたしはまだあんたに言いたいこと……」「こんなにあるのに!!」と発言していることから、自分の発言がマリコに届かないことは理解しているようである。それにもかかわらずマリコに対して呼びかける様子からは、可能ならば届いてほしいという願望も感じられる。このような発話は、送信する意図があるものとして考え、死者であるマリコが受信できない状況から、一方通行のコミュニケーションであると捉える。

マリコとシイノは、互いに一方通行の発信を行なっている。シイノはマリコから送信された発話を受信することはできたが、フィードバックを返さなかったために、マリコからの一方的な送信でコミュニケーションが途絶えていた。シイノはマリコの死後にマリコに向かって呼びかけるが、死んでいるマリコは受信することもフィードバックを返すこともできないため、シイノの送信したメッセージも一方通行となっている。

ここまで、時間軸の交錯による「不成功なコミュニケーション」たちと、シイノとマリコそ

² たとえば、マリコの実家に靴を忘れたことに気づいた際には「しかたねェ あれを出すかな」「わーい!」「初めてのバイト代で買って履き倒したドクターマーチンよ」と、かなり長いセリフを一人で喋っている。

数納：一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について

れぞれの一方通行の発話を見てきた。時間軸の交錯も、相手からのリアルタイムでのフィードバックがない以上、一方通行のコミュニケーションのつぎはぎであると言える。したがって『マイ・ブローケン・マリコ』では、相手からの応答がない一方的なコミュニケーションが多く描かれているが、それらには、一方通行という状況がそのまま読者に提示されている場合と、あたかも相互的なやりとりかのようにして提示される場合とがあるとわかる。

つぎはぎによってコミュニケーションのように見えるよう再構成されたメッセージは、時間軸の交錯という矛盾を曖昧にし、シイノとマリコから互い違いに発信が行われる相互的なコミュニケーションに見せかけられる。

5. マンガにおける視点

「視点」の問題は文学研究の分野で主要なテーマの一つであるが、日本語と英語の文法比較を通して論じた大江（1975）、久野（1978）の指摘を代表として、言語学研究においても重要な概念となっている。認知言語学では、ものごとを言語で表現するとき、その表現は発話者の認知、言い換えれば「捉え方」を反映したものとして考える。状況、事物を言い表すのには「視点」が関わるのであり、これは物語をどのように、特にどの視点から描写するかという問題とも深く関わる。ナラトロジー、マンガ学、言語学といった諸分野が重なり合う「視点」の問題には、作品世界に接触できない立場でありながら登場人物たちと視点や注意を共有するフィクションの読者、分析者と、作品内のコミュニケーションについて考えるにあたり、触れておく必要があるだろう。

第1章の序盤、シイノの勤務態度を咎める上司の発話は「会社の信用がうんたらかんたら」と表現されている。上司が伝達しようとしている情報を正確に受け取らないシイノの理解が、吹き出しの中の情報、つまり読者が受け取る情報に影響を与えている。

マリコの遺骨を抱えマリコの父親に包丁を向けるシイノが、マリコの姿で描かれているページがある。この場面ではマリコの父親が「マリコ」と呟いており、この「シイノがマリコに見える」視点を持っているのはマリコの父親であることが推測できる。また、遺骨を抱えてマリコの実家の窓から飛び降り、川の対岸に渡ってマリコの実家を眺めるシイノの上に、マリコの義母がマリコの父に向かって叫んでいるらしいセリフが羅列されている。描写されている川幅を考えると、これらの発話が実際にシイノの耳に入っていたかは不明である。ここから、この物語の視点が必ずしもシイノの捉えている世界に固定されていないことに留意したい。

出原（2021）は、マンガにおける視点について、「客観的にどうであるかというよりも、どのように捉えられているかを重要視している」（出原 2021：46）とした上で、以下のように述べる。

「マンガは絵で構成されている以上、ある視点から描かれることになる。しかし（中略）写真

や従来の実写映画³とは異なり、マンガは実現不可能な視点をとることも可能であるため、マンガ表現論では多様な視点に関して議論が行われている。」(pp.81-82)

出原はマンガにおける同一化技法に注目する。たとえば、「あ、リスだ」のような発話による共同注意の働きは言語現象でも現れるものだが、マンガにおいては、作中の登場人物だけでなく、視点によって、読者も共同注意に参加させられるとする⁴。

『マイ・ブローケン・マリコ』において、マリコの生きている姿は、シイノの思い出を通してのみ読者に知らされる。注意したいのは、マリコの死亡を報道するニュースの中で使用されているマリコの顔写真である。この写真にはシイノではない、キャップを被った男性と、濃い色で爪が塗られている女性らしき姿が見切れて写っている。したがってマリコには、当然とも言えるが、シイノ以外の交友関係もあり、シイノの知らない姿もあったはずである。しかしそれらをシイノが知ることはなく、またシイノの思い出を通してしかマリコを捉えることができない読者にもまた知らされない⁵。

マリコとシイノが互いに一方的なコミュニケーションを行っていたことを述べたが、これもシイノの認識を通した世界の見え方であり、実際に、完全に客観的な視点から見て二人のコミュニケーションがどのようなものであったかを確認することはできない。また『マイ・ブローケン・マリコ』がそのような作品として描かれた以上、シイノの認識を通していない世界は存在しない。

作品内の会話を分析するにあたっては、作品における視点が、登場人物の言語表現、コミュニケーションにどのような影響を与えているかという点に留意する必要がある。誰が、どのように捉えているかが重要になるマンガの視点は、読者を共同注意に巻き込む。分析者・読者は、登場人物たち、および作品世界に接触できない立場でありながら、視点や注意を共有するとい

³ 原文注「最近ではCGなどを駆使した映画も多く、その中には現実には不可能な視点とりも存在する。」

⁴ 出原(2021:92-93)「もちろん登場人物は読者に気づいてはいないので、厳密には「共同」ではないが、追跡的に登場人物の見る先を追うことで、作品世界への臨場感が高まり、共同注意が成立するように「錯覚」し、「当事者間」に共感が生まれやすくなると考えられる。」とあるように、ここでの「共同注意」とは、互いの注意が同じものに向いていることを互いに知っている状態を指す言語学的定義から少し逸脱した、あくまで錯覚としてのものである。

⁵ 厳密には、シイノが認識していないはずのマリコの姿が描かれている箇所もある。たとえば屋上でタバコを吸っている中学生のシイノを、泣き腫らした顔で見つめているマリコが描かれているが、このときシイノはマリコの方を見ていない。また、父親からの強姦被害を打ち明ける高校生のマリコも正面に近い角度で描かれているが、このときシイノはマリコの後ろで俯いており、このマリコの顔もシイノが見たものではない。余談として、シイノも中学生の頃の私服、喫煙の習慣などから家庭環境に問題があることが伺えるが、このことについてもシイノが語らない以上、読者は描かれていること以上の情報を知り得ない。

数納：一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について

う特殊な立場に置かれる。

次章で『マイ・ブローケン・マリコ』の映画へのアダプテーションによるコミュニケーション描写の変化について触れたのちに、本章で述べたような視点の性質を踏まえて、コミュニケーションを分析する分析者と作品、あるいは作品以外の分析対象との関係について再度考えていく。

6. 映画へのアダプテーションで起こった一方通行性の消失

マンガと映画は、ともにビジュアル的なメディアであるという共通点がある。カメラの存在がほぼ必須となり、小説のような一人称視点はとりづらい。そのため、マンガや映画で物語を認識する鑑賞者は、カメラの視点から、登場人物が知り得ない情報まで獲得することがある。例えば、屋上にいる高校生のマリコの泣き顔は、唯一同じ空間にいるシノがマリコのことを見ていない以上、本来誰も知ることもないものだが、鑑賞者はそれを、物語に介入しない第三者として視認する。

共通する性質を持つ一方で、ページやコマによって読者の積極的な視線の動きを必要とする漫画に対し、映画は一つの大きなスクリーンに鑑賞者の視線を固定し、その中で登場人物などを動かしていくという違いもある。そのため、それぞれがとる「視点」には差異が生じる。

また、マンガを映画化するにあたって大きな変化となるのが、当然のことながら、文字に付随する情報の消失である。マンガでは、セリフだけ見ても⁶、吹き出しの形や配置、フォントなど、様々な要素で情報が付加されている。

本節では、視点、文字情報、そしてシナリオの変更点から、マンガと映画それぞれで描かれるコミュニケーション描写を比較し、マンガから映画へのアダプテーションによって生じた、『マイ・ブローケン・マリコ』に特徴的であったコミュニケーションの一方通行性が消失、あるいは減衰していることを指摘する。

マンガ版『マイ・ブローケン・マリコ』では、フォントや吹き出しの中の鉤括弧使用によって、特にマリコの「過去の発話」が特徴的に示されていた。上述のシノが居酒屋にいる場面では、体の向きや、二人が同じコマの中に描かれないことに加え、マリコの発話が鉤括弧の中に入れられていることで、シノとマリコが、実際には会話できていないことが示唆される。しかし映画版の同場面では、マリコはシノの向かい側の席に実際に座っており、マリコの方を向いて話しかけてくる。また、「せっかくのボーナス」のセリフが消され、あたかも酔い潰れているシノに、まさにその場所、その時間において、マリコが話しかけているかのようになっ

⁶ 効果音などを表す書き文字などもマンガの重要な要素であり、言語学的にもいくつか視点から興味深いものだが、本論で問題として取り扱うことはしない。

ている。その際、マリコの背後からシイノを映すようなショットがあることで、二人が同じ時、同じ場所にいるような印象は強化される。その後シイノが「あんたにはあたしがいたでしょうが」と叫ぶカットで、シイノの向かい側が空席であることが映される。シイノとマリコが二人でいる場面を描かないまま、読者にそうであると捉えさせようとしていたマンガに対して、映画版のこの場面におけるマリコはシイノが見ている幻影が鑑賞者に共有されているような形になっている。

同様の変更は、シイノが岬に辿り着いた場面でも起こっている。中学生、高校生の姿のマリコは映されず、シイノと抱き合う20歳前後のマリコが発話を行う。このあと、痴漢から逃げる少女と中学生、高校生、20歳前後のマリコが重なるところはマンガと同じように表現されているが、フォントや鉤括弧の有無で表現されていたマリコの発話の区別は消失している。

マンガ版でフォントや鉤括弧を使用して特徴づけられていたマリコの過去の発話は、映画化の際に、その特徴づけが失われた。それによって、マンガに存在していた一方的で不成功なコミュニケーションは、映像の中で補完され、双方向的で成功したコミュニケーションとして鑑賞者の目に映ることになる。

またマンガでは、シイノがまりがおか岬を目指すことを決める場面でも、時間軸の複雑な交錯が描かれていた。映画では、泣いているシイノ→まりがおか岬のポスターを指差し「行ってみたいね」と言う20歳前後のマリコ→顔を上げる現在のシイノ、走り出す→笑顔でこちらを見つめる20歳前後のマリコ、という構成で、20歳前後のマリコと現在のシイノの間に中学生のシイノが挿入されていたマンガと比べると、時間軸の交錯及び人物間の応答関係がより単純化されていることがわかる。

シナリオの面では、マンガと比較して、マキオの登場シーンが大幅に追加されているのも映画版の特徴である。マキオはシイノと同じ時間を生きている人間であり、作中において、現在の時間のシイノが会話らしい会話をする相手はほとんどマキオだけである。映画で追加されたのは、野宿から目を覚ましたシイノに歯ブラシを与え歯磨きをさせるシーン、家に帰るシイノを駅のホームまで見送り、弁当とお茶を渡すシーンの大きく二つである。

マリコから送られた手紙に対してシイノが返事を送っているような描写は見られない。また、シイノは生前のマリコに「助ける」とは言わず、マリコもまたシイノに「助けて」とは言わなかった。この互いに一方通行的なコミュニケーションに、映画では変更が加えられている。

シイノは崖で、助けを求めながら走ってくる少女にマリコを重ねる。実際にはマリコが言えなかった「助けて」の声に応じて、マリコは痴漢に飛びかかり、少女を助ける。映画ではこのあと、警察署でのシーンが追加されている。そこでシイノは、自分が助けた少女から、お礼の手紙を受け取ることになる。少女の手紙に書かれている字は、マリコの丸文字とは対照的に、整ったものである。

第四章ははじめの回想で、シイノはマリコに暴力をふるうマリコの交際相手にフライパンで殴

数納：一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について

りかかり、部屋に立て篭もり、声を張りあげていた。その様子を見ているマリコは笑っており、次の回想でも、再び交際相手と会い怪我を負わされたことを笑いながら話している。シイノがマリコを「助ける」ためにした行為に対して、マリコは応えない。

野宿から目覚めたシイノは、通りかかったマキオに「ご自分のこと大事になさってください」と声をかけられ、「同じこと言ったっけな あたしもこのコに」と抱えた遺骨に視線を落としながら呟く。そして「どんなに心から心配してみせたって」「そんなもんじゃどうにもならない所にあの口はいたんだよね」と言い、立ち去る。そして崖に立ち、「あんたがどどんわからなくなった」と発話する。シイノはマリコのことを「心配してみせた」がその実マリコのことを理解できておらず、その「心配」も、シイノが望む形でのマリコの状況の解決には至らなかった以上、一方通行に終始した。

一方で、シイノと少女のやり取りはより単純明快かつ相互的である。少女が助けを求め、シイノが少女を助け、少女はそのお礼をする。シイノは助けてと声をあげる少女にマリコを重ね、マリコとはできなかった相互的なコミュニケーションをここで実現させている。

シイノは、マリコがシイノ宛てに手紙の一つも残さず、一人で死んだことに納得できずにいる。そのことを踏まえると、少女からの「手紙」はやはり、シイノがマリコに対して抱えていたわだかまりの、擬似的な解決のようなものとして描かれていると考えられる。しかし、ラストシーンでは、マンガと同様に、生前のマリコからシイノに宛てた、シイノが知らなかった手紙の存在が明かされることによって、再度、シイノとマリコのコミュニケーションは、互いに一方的なものへと引き戻される。さらにこの場面では、マリコからの手紙の内容は、鑑賞者には明かされない。シイノの視点からも引き剥がされた鑑賞者は、二人の一方的なコミュニケーションを、二人に干渉することなく俯瞰的に眺める立場に立たされる。

『マイ・ブローケン・マリコ』のラストシーンは、相互的に一方通行なコミュニケーションの試みを、それ自体である種完結したものとして描いている。これによって、送信者が意図して送信したメッセージを、受信者が、それが意図されたものであるということを理解して受信しフィードバックを返すという、従来の定義に則した「成功したコミュニケーション」ではない形のコミュニケーションも、完成したものとして存在できる可能性が示唆されている。映画へのアダプテーションは、一方通行のコミュニケーションよりもリアルタイムでそこに存在している者どうし（シイノとマキオ、助けを求める少女⁷⁾、の「成功したコミュニケーション」が強調される形となった。しかし、シイノとマリコのように、互いに一方通行な送信のまま終わる

⁷⁾ 映画では、シイノが乗った岬に向かうバスに、周囲で同年代の女子が談笑している中、一人で静かに座っている少女が印象的に映されている。また、この少女が降車した際、シイノが窓から手を振る描写が追加されている。終盤で痴漢に追われているのはこの少女であり、伏線が追加されたような形になっている。このバスのシーンと、文中で述べた少女からの手紙のシーンの追加によって、映画ではマンガと比較して、より生きている人物とのコミュニケーションが強調されていると言える。

コミュニケーションは現実にも存在する。また、この一方通行性は、マリコからの手紙の内容が明かされないという、シイノとマリコの世界から読者を引き剥がす演出によって、一方的に作品を観測する読者と作品、また分析者と分析対象の関係とも関連しているとも言える。

7. おわりに

本稿は『マイ・ブローケン・マリコ』を対象に、作品の中のコミュニケーションの分析を行い、作中で描かれる一方通行的なコミュニケーションの存在と、それを観測する分析者の立場について捉え直すことを試みた。シイノとマリコは互いに一方的にメッセージを送信し合い、そして互いに受け取らない（受け取れない）。過去のマリコが書いた手紙を読んだシイノが「うん」と言うラストシーンにおいても、過去と現在、手紙と発話という多重に不成功なコミュニケーションが描かれる。『マイ・ブローケン・マリコ』は、一方通行のメッセージのつぎはぎによって、成功したコミュニケーションのように見えるものたちが描かれていた。

『マイ・ブローケン・マリコ』の、特にラストシーンで強調されたような、一方通行のまま当事者間で完結しているコミュニケーションは、従来の研究ではコミュニケーションではない、あるいは失敗したコミュニケーションとして考えられてきた。しかしそれは話し手と聞き手のやりとりを外から一方的に観測し判断する分析者の立場から見た結果である。

作品に対する読者の立場は、登場人物を一方的に観測するものであるという点では対象と切り離されており、作品の視点に影響を受けるという点では対象とのインタラクションの中にある。メイナード(2023: 4)はテレビドラマを対象に分析を行い、ゴフマンがドラマのメタファーを通して日常の言語現象を説明したことから、フィクションが現実世界を「手っ取り早く捉えることを可能にする」と述べている。

当然、フィクションと現実とは同一ではない。フィクションで使用される表現技法、たとえばマンガであれば吹き出しやフォント、コマ割りなどは、フィクションならではの世界を作り上げる。セリフの選択においても、作品の中にあるのは日常生活で実際に使用されるものよりも整然としたものであり、現実世界の発話をそのまま映し取っているようなものは少ないだろう。また、作品と鑑賞者の関係も、学術的な手法で言語使用を分析しようとするときの分析者と分析対象との関係とは完全に同一ではない。しかし、フィクションの中の言語使用やコミュニケーションを分析すること、およびその際の分析者と分析対象の関係を分析することは、日常の言語使用やコミュニケーションを分析することと連続性がある。

作品の読者、鑑賞者は、作品世界内部の登場人物たちのコミュニケーションに接触することはできず、そのコミュニケーションを分析するにあたって、相互的に関わり合う関係にはなり得ない。分析者が登場人物たちの会話、コミュニケーションをどのように捉えようと、会話、コミュニケーションには影響がない。つまり、当事者たちに接触することなく完全に一方的に

数納：一方的で不成功なコミュニケーションとコミュニケーション分析における分析者の立場について

やり取りを観測する立場に立っている。その一方で、分析者は、ビジュアル的メディアの視点によって、作品内に巻き込まれている。この点で、分析者はその視点を牽引する何者かの認識がもたらす影響から逃れることができない。また、分析者は、「受け手」という立場は作品内の聞き手と共有するものの、話し手である登場人物が受け手として意図していない、そして話し手に対して何か反応を返すことができないという点では差異がある。この分析者という立場の特殊性を捉え直すことは、コミュニケーションや言語使用の分析を捉え直すことにもつながる。また、この分析者の立場は、フィクション作品を分析する際により際立って意識されることから、フィクション作品を通した分析が有用であると考ええる。

分析者と分析対象という関係を捉え直すこと、また本稿で扱った一方通行的なコミュニケーションのような、これまで「コミュニケーション」の中心には置かれてこなかったようなコミュニケーションを扱うことは、言語使用とコミュニケーションについての研究に新たな視点をもたらす契機になるのではないだろうか。

(かずのう ふうか・人文学専攻)

参考：マンガ『マイ・ブローケン・マリコ』梗概

粗野な印象のある 26 歳の女性会社員である主人公・シイノトモヨ（以下シイノ）は、唯一の親友であるイカガワマリコ（以下マリコ）の転落死をテレビのニュースで知る。マリコが父親から虐待を受けていたことを思い、シイノはマリコの実家を訪問し、父親との格闘の末に遺骨を奪取して逃走する。マリコからの手紙を入れた缶を入れたリュックを背負い家を出たシイノは、マリコは自分に手紙の一つも残さずに死んだのかと疑問を抱きながら、生前のマリコが「行きたいねえ」と口にしていた“まりがおか岬”を目指す。岬のある町に着いた直後、シイノはバイクに乗ったひったくりでリュックを奪われ、遺骨をその場に置いて犯人を追いかける。リュックを取り返せずに戻ってくると、男（以下マキオ）が遺骨を見守っていた。マキオは全財産を奪われたシイノに五千円札を渡し立ち去る。シイノはマキオに渡された金で居酒屋に入り、そこでマリコの幻影のようなものと会話する。翌日、マリコとの過去のやり取りを思い出しながら、シイノはまりがおか岬で遺骨に向かって叫ぶ。激情のまま海に身を投げようとしたシイノを通りがかったマキオが止めようとしてもみ合っていると、近くの草むらから少女が「助けて」と言いながら走ってくる。男に追われ泣きながら逃げる少女の姿にマリコを重ねたシイノは、遺骨で男に殴りかかり、遺骨とともに宙を舞う。崖の下で目を覚ましたシイノに、マキオが「自分も半年前飛びました」と話しかける。自宅に帰ったシイノは、ドアにマリコの義母からの荷物がかかっているのを見つける。中に入っていたマリコからの手紙を動揺しながらも読んだシイノは、「うん」と呟いた。

使用作品：

平庫ワカ 『マイ・ブローケン・マリコ』 (KADOKAWA, 2020)

(初出：COMIC BRIDGE online 『マイ・ブローケン・マリコ』 2019年7月16日～2019年12月17日配信分)

参考文献：

泉子・K・メイナード (2023) 『ミステリードラマの日本語 発話と記号の演出を探る』 (くろしお出版)

大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究 主観性をめぐって』 (南雲堂)

大橋理枝, 根橋玲子 (2019) 『コミュニケーション学入門』 (放送大学教育振興会)

柏端達也 (2016) 『コミュニケーションの哲学入門』 (慶應義塾大学三田哲学会叢書)

久野章 (1978) 『談話の文法』 (大修館書店)

小山哲春, 甲田直美, 山本雅子 (2016) 『認知語用論』 認知日本語学講座第5巻 (くろしお出版)

出原健一 (2021) 『マンガ学からの言語研究—「視点」をめぐって』 (ひつじ書房)

Grice, H. Paul (1985) *Studies in the way of words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (清塚邦彦訳
(1989) 『論理と会話』 (勁草書房))